

## RISTのこれまで、そしてこれから

熊本大学 特任教授  
高口 義幸



RIST設立30周年誠にありがとうございます。長く幽霊会員の私にこのような機会を与えていただいたのは「官から学へ」移った経験を持っていることだと推察しています。

本会10周年に際して寄稿した際、当時、注目されていた「シリコンバレーモデル」を踏まえ、当会に大学発ベンチャーの創出を期待していました。残念ながら、熊本でシリコンバレーモデルの実現はできませんでした。地域の産学行政がコンソーシアムを組んで新産業を創出しようという試みは、いくつかの企業の成長戦略の基盤になった事例もありますが、産業集積を形成するまでには至らなかったと思います。しかし、この20年間でいくつかの大学発ベンチャーに係わる機会を得ることは私にとってとても幸運なことだと思います。

10年前のリーマンショックを契機として産業構造の転換が進んでいます。その時期に策定した熊本県産業振興ビジョンで、オープン・イノベーションによるニッチトップ企業の創出をめざすことを県の最重点施策に位置づけました。そのターゲットとして「社会・システム」分野を新たに加えましたが、予想以上のスピードでIoT化が進展していると思います。「企業寿命30年説」というのがありますが、「知能システム」をキーワードに設立されたRISTは30年を経過し、今、IoTやAIが脚光を浴び、その存在感を再度高める時期に来ていると思います。ビッグデータを活用して新しいビジネスを創

出していくことも大切ですが、人材不足が深刻化する中、製造工程へIoTやAIを導入することにより生産性向上を図ることも重要だと思います。

私は、IoTやAIの進展にもう一つの可能性を期待しています。明治維新以来の中央集権型社会は、人財の首都圏への集積を促してきました。しかし、IoTの進展により都市部でしかビジネスができない時代ではなくなるのではないかと期待しています。IoTの普及により自律分散型社会が実現できる可能性があると思います。そのためにRISTはIoT普及の先導的役割を担っていただきたいと思っています。

また、高い志をもっている学生ほど“就社”ではなく“就職”を考えているように感じます。自分のやりたい仕事であれば、ベンチャー企業でも田舎に移住することを厭わない若者もいます。しかし、熊本の企業はB to Bの企業が多いこともあり、学生と企業が接する機会があまりありません。これまで、RISTは、大学の教官と企業の技術者が交流する場として機能してきました。しかし、今後は、そのような役割にとどまらず、学生も含めた交流の場としての役割が必要ではないでしょうか。それが地方創生にも大きく貢献すると思います。

RISTが次の30年に向けて大学と地域企業との架け橋として、ますます発展されることを祈念いたします。